エコロジカルな生活の原点
～ノイブルク修道院～

松田　雅央
ドイツ環境情報センター

修道士の一日は祈りに始まり祈りに終わる。古都ハイデルベルクの郊外、ネッカー川を見下ろす丘に建つノイブルク修道院では17人の修道士が世俗を離れ、聖書の教えと聖ベネディクトの戒律を実践する共同生活を送っている（図1）。

聖ベネディクトは祈りと共に労働の大切さも説いており、修道士はそれぞれ何らかの仕事を担当するのが決まりだ。ノイブルク修道院は所有する30ヘクタールの土地で酪農、マスの養殖、果樹園を手がける他、自然食品店と園芸店も経営している。いずれの事業も修道士の高齢化や人手不足といった事情で外部委託されているものの、豊かな自然の恵みに感謝するエコロジカルな生活の姿勢に変わりはない。

家畜の糞尿は発酵処理してバイオガス発電に利用し、暖房・給湯をまかなうのは木材チップを燃料とする新型ボイラー。古めかしいイメージに包まれた修道院と、時代を先取りした環境技術の取り合わせが奇抜に感じられるものの、あらゆる無駄を省いた修道士の生き方は再生可能エネルギーの考え方と根底で繋がっている。

環境保全と持続可能な発展が注目されるようになったのはここ30年の話だが、修道士にとっては数百年来実践してきた自明の営みである。我々は彼らから大切なことを学べるのではないか。本稿では修道士の生活をエコロジーの視点から眺めてみたい。

◆聖ベネディクト

修道院とはキリスト教において修道士または修道女が共同体を形成し、修行を目的に居住する施設である。修道院はそれぞれの修道会に直属し、主としてカトリック教会や東方正教会に多い[1]。

ベネディクト（480年－547年、図2）が生まれた当時のイタリアはローマ帝国の崩壊に伴う政治的混

図1　ノイブルク修道院

修道院の建物は草原・果樹・森に囲まれた静かな環境にある。この看板は修道院の自然食品店のもので「マス販売中」と書かれている。看板上部のロゴはノイブルクの頭文字「N」に酪農の象徴「牧童の杖」をあしらった修道院の紋章。

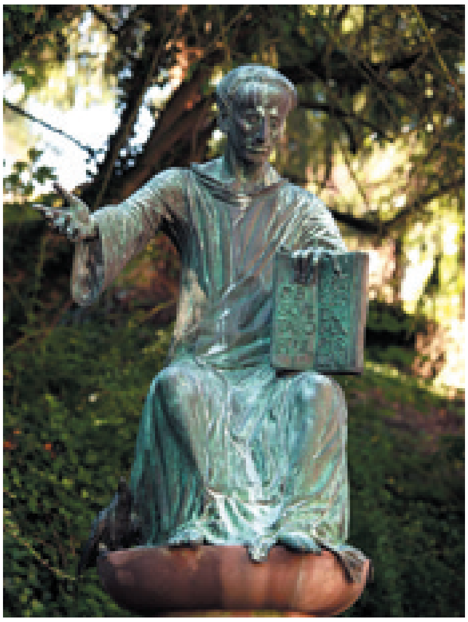

図2　ノイブルク修道院の聖ベネディクト像

左ひざに乗せているのはベネディクトの戒律。最初の教え「子よ、心の耳を傾け、師の教えを謹んで聴きなさい」が刻まれている。

図3　1530年に建てられたゴシック様式の礼拝堂
歴史的建造物として市の文化財に指定されている。

図4　子牛の小屋
幼稚園の見学グループが子牛（生後４～６週間）の飼育小屋を見学している。

乱、経済的困窮、道徳的荒廃に直面する苦難の時代にあった。福音の教えに共鳴したベネディクトはローマでの学業半ばにして、スビアコと呼ばれる山間で隠遁生活を始めたと伝えられている。

彼はその体験から、隠遁生活は共同生活の中で充分訓練を受けた者がするべきことと悟り、ローマとナポリの中間にあるモンテカシノに修道院を建てた（525年）。彼はそこで共同生活を送る人のために「聖ベネディクトの戒律」を集大成し、ベネディクト会の修道士は今もこの戒律に則った生活を送っている。

ベネディクト以前にも洞窟や荒野で独居し苦行するキリスト教徒や、人里離れた土地を拓き修道院で神と共に生活する修道士はいたが、聖ベネディクトが歴史上の特別な存在とされるのは、修道生活のあり方を確立し、ベネディクト会に限らず修道院の規範を完成させたことによる。現在、ベネディクト会は世界中で活動し、ドイツだけでも男子・女子を合わせ20余りの修道院がある。

◆社会との関わり

ノイブルク修道院はローマ・カトリック教会に属する男子修道院であり、正式名称を「ハイデルベルク・ベネディクト会・アプタイ・ノイブルク[注1]」という。まだハイデルベルクのまちが形成されていない12世紀はじめ、この地ノイブルクに設立された。12世紀終わりには女子修道院への組織替え、16世紀半ばには宗教改革による修道院の解散、その後も幾多の変遷を経て、1927年に男子修道院として再建されている。

ノイブルク修道院は一般の教会と異なり、修道士が積極的に社会へ入り人々に直接奉仕することをしない。従順、謙遜、愛といったベネディクトの教えに従い、神の探求と賛美が究極的に目指される。

しかしながら、これは社会との関係遮断や隠遁生活を意味するわけではなく、祈りと働きを通した人々との結びつきも大切にしている。例えば礼拝堂（図3）は常時開放され、毎日数回行われる礼拝への参加に制限はない。人生に迷い修道士に教えを請う人もいるし、子供たちが課外授業（図4参照）で訪れたり、貧しい人への給食も毎日行なわれている。修道士には物静かな人が多いようだが、訪問者と気

[注1]：「アプタイ」は修道院長を意味し、ここでは修道院の運営形式を示している。

図5　修道士と談笑する訪問者

軽に談笑する姿は珍しくない（図5)。

修道士が世俗に降りてキリストの教えを広めることはないが、訪れる人に対する扉は常に開かれている。

ただ、同じベネディクト会の修道院であっても活動の性格は様々だ。病院や学校を運営したり、海外での布教活動を行うミッション系の修道院がある一方、逆に社会との関係を極力絶つ修道院もある。

◆ホスピタリティーの起源

ベネディクト会の修道院にはゲストハウス（宿泊施設）が併設されており、体験生活を希望する人だけでなく一般市民が利用することもできる。日本の寺院はところにより宿坊と呼ばれる簡易宿泊施設を運営しているが、そのイメージに近い。今回、筆者もゲストハウスのお世話になり、礼拝、修道士との食事など修道院の生活を体験させていただいた。

ゲストハウスの個室はシンプルだ（図6)。およそ12m^{2}のこじんまりした部屋にあるのはクローゼット、ベッド、洗面台、机と椅子、そして聖書のみ。トイレ・シャワーは共同になっている。この日は筆者を含め４人が宿泊した。

机に置かれたパンフレットは「ゲストは修道院に欠かせないものです」という聖ベネディクトのメッセージで始まっている。これは客を丁寧にもてなすホスピタリティーの精神を具体化した言葉だ。パンフレットにはさらに、希望があれば礼拝に参加できること、昼食と夕食も修道士と一緒にとれること、宿泊する上での簡単な注意等が書かれている。ちなみに、ホスピタリティーという言葉は修道院における客のもてなしから生まれた言葉だと聞いた。

図6　ゲストハウスの個室

宿泊料は朝食・昼食・夕食込みで１人１泊30ユーロ。ここは男子修道院なので、宿泊は男性に限られる。

修道院がゲストハウスを運営するのには実利的な理由もある。旅が命がけだった時代、ゲストハウスは修道士や旅人の安全な宿として貴重な存在だった。旅事情は大きく変わったが、旅人をもてなす精神はなお生きている。

◆質素を旨とする

パンフレットに書かれた修道士の日課によれば、起床は４時45分、１日７回祈りの時間があり、夕食は18時40分、就寝は20時。もちろんこの日課は宿泊客に強制されるものではない。どこまで修道士と同じ生活が許されるかは修道院によって異なり、礼拝から昼食・夕食まで参加できるノイブルク修道院はかなり開かれていると思う。

筆者も昼食前に行われる礼拝堂での祈りに参加さ

図7　食堂

修道士は壁際の席に座り、宿泊客は中央のテーブルを使う。食事の前後には必ず全員が起立し短い祈りを唱える。

図8　図書館

20世紀初頭に再建された比較的新しい修道院であるため蔵書は少ない。

せていただいた。調理当番や修道院外で働く修道士もいるため、この時間の礼拝に来られる修道士は10人程度に限られる。

大食堂（図7）で昼食をとる間、当番の修道士が本を朗読する。これもベネディクトの戒律で、宗教、歴史、政治に関する本が好んで選ばれるが、（常識の範囲内で）ジャンルに制限はなく太陽光発電や風力発電といった再生可能エネルギーの本が朗読されたこともある。

食事の献立は朝食がパンとお茶、昼食はサラダ・スープ・メイン（肉やパスタなど）、夕食はパンとハム・チーズ。使われている食材と料理の内容は大変質素だ。

ひとつだけ困ったのは食事の時間が極めて短いこと。修道士は食べるのがとにかく早く、三食のメインとなる昼食でさえ15分程しかかけないから、訪問者は慣れるまでが一苦労だ。食事に時間をかけることが「罪」に当たるのかと思い、世話をしてくれた修道士テオドアに尋ねたところ「そういうわけではないけど、最初は私もびっくりしたよ！」と笑っていた。修道士の生活に食を楽しむという感覚が入る余地はない。

◆祈り、働け

ベネディクト会の標語「ora et labora（祈り、働け）」に聖ベネディクトの精神が凝縮されている。労働を信仰に不可欠な要素として捉え、生活の糧を得るための労働を求める教えだ。

分業の進んだ現代と違い、昔は労働が衣・食・住と直結していた。人里離れた修道院で修道士が働くということは、すなわち農耕や酪農を意味し、必然的に自給自足が基本的な生活スタイルとなった。ベネディクトの戒律は必ずしも自給自足を強いてはいないが、修道院によっては今もそれを原則としている。

ノイブルク修道院の場合はほぼ酪農に特化し、40頭余りの乳牛飼育（図9、10）が中核事業である。

修道院の経済活動を事業と呼ぶかどうかは微妙なところだが、広大な敷地と建物を維持し20人近くの修道士が共同生活を送るためには安定した財源が必要だ。修道士は霞を食べているわけではないし、電気代・水道代・暖房費も払わなければならない。修道士は公的な年金制度に加入していないため、病気や老後に備えた基金を独自に運営している。

多額の費用と人手のかかる建物の改修には、市民協会であるノイブルク修道院友の会が力を発揮する。対象が文化財であれば公的な補助が見込め、市長が

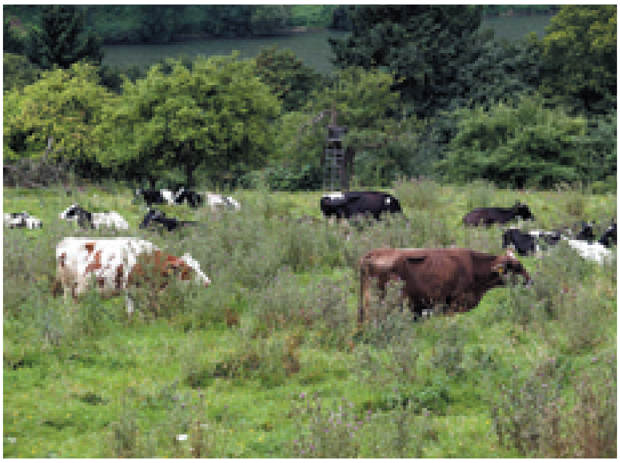

図9　乳牛の放牧

経済効率から、年間を通して畜舎で乳牛を飼う酪農家が増えているが、ノイブルク修道院では夏の放牧を続けている。

図10　搾乳の様子

図11　自然食品店

修道院の牛乳・マスの加工品・果物、その他の自然食品、エコロジー関連商品が並ぶ。自然食品店の運営は以前から外部の業者に委託されている。

図12　ブドウの剪定

建物や緑地の管理も、可能な限り修道士が行なう。

寄付募集のパンフレットに言葉を寄せてくれることもあるが、修道院への継続的な経済援助というものはない。

これまでノイブルク修道院の酪農は修道士自ら行ってきたが、担当の修道士ベネディクトも75歳。彼は暖房機器の管理と見学グループの世話も担当しているためそろそろ引退となり、酪農はこの夏から外部の会社に委託されている。

彼は酪農作業中の事故で足を骨折し、6週間ギプスをはめていたことがある。「働き過ぎだ。もっと祈りに時間をとれ！という神の戒めだったんだね(笑)」と修道士ベネディクト。

◆再生可能エネルギーの利用

数年前に設置されたコジェネレーション設備（図13、14）では46世帯分に相当する電力が生産され、年間およそ170トンの二酸化炭素排出削減効果が期待される。

設備を建設したのはハイデルベルク市のエネルギー・水道公社で、運転管理も同社が行っている。ドイツでは再生可能エネルギー由来の電力売電価格が法律によって保証されており、深刻な問題がなければ15年程度で投資に見合った電力収入が得られる。ノイブルク修道院には自前でバイオガス設備を設置する選択肢もあったが、資金的な問題もありそこま

図13　コジェネレーション設備

大きな畜舎の前に、発酵槽（手前にある銀色のタンク）、燃焼設備（小さな小屋、出力35kW）、バイオガス（メタン含有量55－60%）のタンク（奥にある縦長の構造物）が並ぶ。

図14　糞尿の一時貯蔵タンク

すでに発酵が始まっているため表面に気泡が浮かんでいる。夏は畜舎から回収される糞尿の量が減る（日中、乳牛は草原で過ごす）ため、民間のリンゴジュース工場から出る絞りカスを追加する。

図15　木材チップを燃料とする新型ボイラー（KWB 社製）

修道院の地下に出力150kW のボイラー２基が設置されている。ボイラーの管理も修道士テオドアの担当。

図16　木材チップの貯蔵室

ボイラーへの木材チップ供給も自動化されており、管理の手間はほとんどかからない。ただ、木材チップはエネルギー効率が劣るため、どうしても貯蔵室（ここは容量80m^3）が大きくなる。また、冬季は週１回程度の頻繁な補充が必要だ。

では踏み込まなかった。

公社には再生可能エネルギーを開発する社会的責務があり、この事業は効果的な PR になる。片や修道院はコジェネレーション設備で生産された温水を無料で利用することができる。もうひとつ、糞尿処理の手間と費用がかからず、発酵処理を終えた糞尿を良質の肥料として利用できることもメリットだ。

また、ノイブルク修道院では今年、暖房・給湯用に木材チップを燃料とする新型のボイラー（図15、16）を導入した。これまでの灯油を利用するボイラーに比べ、燃料費はおよそ４割に抑えられる。世界的な石油価格の上昇傾向が続けば、コストパフォーマンスはさらに上昇する。

修道士テオドアの表現を借りれば「いつの時代も修道院は先駆者」であった。

修道士が知識人の代名詞であり修道院が最新技術をリードしていた時代、修道院では書物が著され、

図17　修道院の湧き水を汲みに来た市民
ここの水は評判が高く、わざわざ汲みに来る市民が絶えない。水は無料だが、心ある人は募金箱に小銭を入れてゆく。

医薬品が生産され、ワインやビールが醸造されていた。修道士にとってハイテクは決してタブーではなく、ノイブルク修道院でもPCとインターネットを積極的に活用し、自分でホームページを運営している。

ノイブルク修道院が家畜の糞尿を原料とするバイオガスの利用を始めたのは戦後間もない1946年。その頃、バイオガスをどのように利用していたのか詳細は不明だが、間違いなく実験的な試みだったはずだ。

◆進む高齢化

時計職人だった修道士テオドアが修道会に入ったのは今から54年前。修道士になることは一般社会から離れることを意味するので、本人のみならず家族にとっても大きな出来事である。決意を知らされた家族は驚いたが、敬虔なカトリック教徒である両親は「お前の自由にしなさい」と言ってくれたそうだ。

押しなべて人々の宗教心が薄くなっている今日、ドイツで修道士を志す人は多くない。ノイブルク修道院の最高齢は87歳、最若年は40歳、平均年齢はすでに60歳を超えている。基本的に修道士は亡くなるまで修道院に留まり、必要があれば他の修道士に介護してもらうので、極端な高齢化は修道院存続の危機でもある。

図18　マスの養殖池にて

◆色あせないベネディクトの精神

人間も自然の一員であることを認識し、地球に生きる生物として「こう生きるべきだ」、あるいは「こんな風に生きたい」という思いを実現させる暮らし方。筆者は「エコロジカルな生活」をこのように定義する。卑近な例としては自然で健康的な食生活、環境への負荷を極力減らす生き方、緑に恵まれた暮らしなどが挙げられる。

ノイブルク修道院の農産物はほとんどがビオ食品（自然食品）であり、1994年には公的な認証も受けている。しかし修道院のビオ農業は時流に合わせた付け焼刃的なものではなく、人間と自然に無理のない農業を維持してきた結果に他ならない。現代人がそれを持続可能な農業と呼ぶようになったまでだ。

修道士のシンプルな生活と、人生を深く見つめる生き方は、エコロジカルな生活と見事に共鳴する。贅沢を慎み、足るを知る彼らの生活がことさら新鮮に感じられるのはなぜだろう。結局、時代の方が修道士の生き方に追いついてきたのだと言える。

進歩とは何なのか、発展とは何なのか。1,500年

を経ても揺るがないベネディクトの精神を通して世界を眺めると、社会の常識とされる物事が急に心もとなく思えてくる。

1ユーロ≒164円

参考文献・出典：

⑴　Microsoft エンカルタ総合大百科より引用

取材協力：

＊ハイデルベルク・ベネディクト会・アプタイ・ノイブルク（Benediktinerabtei Neuburg Heidelberg）
　http://www.stift-neuburg.de/

＊ハイデルベルク市エネルギー・水道供給公社（Stadtwerke Heidelberg AG）
　http://www.hvv-heidelberg.de/

＊KWB－バイオマスエネルギー有限会社（KWB - KRAFT UND WÄRME AUS BIOMASSE GMBH）
　http://www.kwb.at/

〈ドイツ環境情報センター（DUIZ）のメインサイト〉

http://www.umwelt.jp/